

contents

「仮性包茎なんて言葉はやめてしまえ」プロジェクト …………… 1	思いこみのめがね ^① …………… 12
第10回世界性の健康デーin東京・報告 …………… 8	多様な性のゆくえ ^② …………… 13
性教育の現場を訪ねて ^③ …………… 10	今月のブックガイド …………… 14
	JASEインフォメーション …………… 15

「仮性包茎なんて言葉はやめてしまえ」プロジェクト 身体の自律と保全に関する国際比較研究

東海大学教養学部国際学科教授 小貫 大輔

仮性包茎なんて言葉はやめてしまえ！

「包茎になるかもしれない…」高校生だったころ、そういう不安をいただいたことを思い出します。雑誌を開けば「包茎は男の恥、短小・早漏のもと」といった話であふれているし、大人向けのマンガといえばことあるごとに包茎を揶揄しています。銭湯にいけばたいがい大人のペニスが見事にむけているし、自分の父親も確かにそういう姿をしています。それに対して自分のペニスはというと、どう見ても自然にむけてくる気配なんてありません。「包茎になるかもしれない」んじゃないくて、「これって包茎そのものじゃん！」という恐怖なわけです。「お父さんは何歳でむけたの？ どうしてむけたの？ どうしたらむけるの？」と聞けばよかったのかもしれませんが、私にはとてもできませんでした。

雑誌には「包茎手術」の広告がさんざん出てくるのですが、高校生の自分にはそんなお金はないし…。結局どうしたのかというと、「これ以上待ってられない」と考えて、亀頭が露出したままになるように自分

で包皮をむいて「訓練」してみたのでした。バレーボール部に入っていたので、練習のたびに擦れて痛くて、トイレに駆け込んでもとに戻したり、練習が終わるとまた包皮をむいて、そっとパンツの中にしまっただけで…。ああ、大人になりたいが一心の、何と涙ぐましい努力であったことか。

3か月ほどもそんなことを続けると、なんとその「訓練」は成功していたのでした。あれから40年がたった今となっては、以前のようにかぶせてやろうとしても、すぐにまた元に戻ってしまいます。アフリカ南部・東部の一部の地域では「小陰唇伸長」といって、女兒の小陰唇を母親ほか家族の女性たちが引っ張って引き伸ばす習俗があるそうですが⁽¹⁾、私に起きたことはその反対で「包皮縮短」とでも呼べるようなことでした。

幸い、近年はネット経由で「日本人の7割は仮性包茎」というものの言い方が広がっているようで、若い人たちの間には「むけてないのが多数派なら、ひとまずはまあいいか」という安心感も生まれているのかもしれませんが、ちょっと待ってください。「7割が仮性包茎」なら、その状態が正常なのであって、なんで「仮性」などという病気の一步手前みたいな言葉

を使うのでしょうか。むしろ3割の「むけてる」人たちの方に、自然の発育のプロセスとは違う「何か」が起きているのではないのでしょうか。

「むけたペニス」は、自然にそうなるのではなく、実は日本独特の文化的プレッシャーから「作られたもの」、つまり意識すると意識しないとにかかわらず人為的な身体改造の産物なのではないか…、私はずっとそのように考えてきました。そして昨年、とうとう、文部科学省の科学研究費補助金（科研費）を獲得し、「身体の自律と保全に関する研究（国際比較）」と題してこの仮説を科学的に追究していくことになりました。この研究には、インターセックスやトランスジェンダーの人たちと医療のよりよい関係性を追究するプロジェクトも含まれています。共同研究者は、過去に日本性教育協会（JASE）会議室で開催された2つのシンポジウム、「My Body, My Life? 身体と性の自律について?」（2014年）と「男児の性器切除と身体の自律性・完全性に関する権利」（2017年）⁽²⁾を企画・主催してきた大阪府立大学の東優子教授です。

私が参加する分担研究には「日本人男性のペニス包皮をめぐる身体イメージと保健行動に関する研究」というタイトルがつけられているのですが、私の中では「仮性包茎なんて言葉はやめてしまえ！」プロジェクトです。この研究では、世界各地の研究者と協力して「包皮のケア」についての国際比較をする計画で、まずは手始めに日本における実態を明らかにするべくインターネットを使ったアンケート調査を実施したところです。その結果はまだ分析途中なので速報値のようなものしか紹介できませんが、本稿では、私自身の経験の他に、どういう理由で私たちが「仮性包茎」という言葉を不適切であると考えるにいたったか、包皮をめぐる日本の文化と海外の文化を比較しながら述べてみたいと思います。

海外には仮性包茎という概念がない

まずそもそも明確しておきたいのが、「仮性包茎」という言葉は英語をはじめヨーロッパの言語には存在しないということです。西洋文化圏では、ペニスには「包皮を切除したペニス」と「包皮を切除していないペニス（よって亀頭が包皮におおわれているペニス）」しかなくて、後者にあえて名前を与えるなら「自然な

ペニス」としか言いようがないのです。

世界には、信仰や部族への所属の証として包皮を切除する「割礼」の文化が多々あります。ユダヤ教徒やイスラム教徒がよく知られた例ですが、アフリカの多くの地域や太平洋の島々でも割礼がおこなわれ、古くはマヤやアステカの文化でもおこなわれていたようです。そういう文化を持つ人たちと、そうでないヨーロッパの人たちとではペニスの外観が違うものです。ナチスはユダヤ人の子どもをみつけるために、小学生にパンツを脱がせて確認したという話があるほどです。また、20世紀になって医療者が乳幼児の包皮切除を推奨してきた米国では、「生後2日以内に切るのが当たり前」という考えが定着しています。つまり、亀頭が露出しているか露出していないかの違いは、切っているか切っていないか、つまり民族や国籍の違いなのです。私は、24歳のときにスペインのヌーディストビーチにいったことがあります。そのとき、そこに横たわる男性たちの（大小のサツマイモのような）ペニスがすべて（！）包皮におおわれているのを見て大きな衝撃を受けました。「そうだと思った！」と叫んだのをおぼえています。高校生ときに悩んだ自分がかわいそうに思えて悔しかったのでした。

その後、性教育の勉強のためハワイ大学に留学したのですが、米国人の指導教授に日本の若者の「包茎の悩み」を説明するのにどんなに苦労したことか。「仮性包茎」という言葉が英語には存在しないことを知ったのもそのときです。「包茎（phimosis）」という言葉はあります。病変などによって包皮が亀頭に癒着していたり、包皮開口部が狭すぎて容易に亀頭を露出させられないことをいいます。つまり医学用語の「包茎」とは、日本という「真性包茎」のことだけを意味するのです。

ただし、新生児は全員「包茎」の状態で生まれてきます。つまり包皮が亀頭に癒着していて、包皮開口部も狭いので、引っぱってもむけない（翻転できない）のが当たり前のことです。そのことで、ある意味完璧に亀頭が保護されているわけです。無理をして引っ張ると、癒着がはがれて出血したり、包皮の狭いところが輪ゴムみたいに亀頭をしめつけて元に戻らなくなったりするので、絶対やってはいけません。乳幼児の包茎を、大人の「病理的」な包茎と区別して「生理的包茎」といったりもします。生理的包茎は、たいていの場合、ペニスの成長とともに自然に解消されていきます。生

理的包莖が日本でいう「仮性包莖」のことかという、それは違います。生理的包莖は、乳幼児期に「むこうとしてもむけない」ときのペニスと言うのであって、大人のペニスが「むけばむける」のなら、それは「自然なペニス」としか言いようがないのです。

なぜ日本には「仮性包莖」なんて「病気の一步手前」みたいな言葉が存在するのでしょうか。高校生のとき家にあった医学事典で包莖のことを調べたことを思い出して、今なら何と書いてあるのか図書館で確認してみました。「包莖」の項には、「成長しても亀頭が露出しないもののうち、手で簡単に露出できるものを仮性包莖といい、露出の困難なものを真性包莖といいます」とあります。でも、「仮性包莖」って医学用語なんですか？ 同じ項には「普通、陰茎の先の亀頭は、幼児までは包皮という皮膚におおわれています。しかし、成長すると亀頭が露出してきます」ともあります⁽³⁾。それって本当なのですか？ 大人になると自然に亀頭が露出したままになるのでしょうか？ それって、何かの研究結果に基づいた記述なのですか？

1995年の日本・ドイツ比較 「突撃インタビュー」調査

性教育に携わるものとして、いつかこのことを明らかにしようと思ってきました。パイロット・スタディ（試験的な調査）と称して、「突撃インタビュー」を取行したこともあります。ある夏の日、鎌倉の海水浴場で100メートル四方の範囲を決め、そこに座って休んでいる男性全員（有効回答97人）に、あなたのペニスの包皮はどうなっていますか、それはどうしてそうなったのですか、と聞いて回ったのでした。質問項目は事前に用意して、それをインタビューアーが読み上げました。対面インタビューにしたのは、そうでもしなければ最後までアンケート用紙に記入してくれる人なんかいないんじゃないかと思ったのと、「むけていたらこっちの質問にいく」、「むけていなかったらあっちの質問にいく」といった仕組みがわかりづらいと思ったからでした。国際比較もしてやろうと思って、その同じ夏にドイツのベルリンに寄った際、あるヌーディスト公園で同じ調査を実施しました。全裸で日光浴をしている男性全員（有効回答52人）に答えてもらったので、こちらは実物の目視もできたわけでした。私

が34歳の大学院生だった、1995年のことでした。

結果は、予想した通りのものとなりました。通常時（勃起していないとき）の大人のペニスは「むけているものだと思うか、むけてないものだと思うか」と聞くと、日本の男性は63%が「むけている」のが一般的だと答えました。ところが、ドイツ人でそのように答えた人は一人もいない（！）ではないですか。では本人のペニスはどうかと聞くと、日本では半数以上（54%）の男性が自分のペニスは「亀頭がすべて露出している」と答えました。それに対して、そのように答えたドイツ人はたった1人（！）しかいませんでした。包皮を切除したわけでもないのに「むけている」そのドイツ人は、「自分だけ他人のペニスと違うのはどうしてなんだろう。どうしてそうってしまったのか、以前から誰かに聞いたかった」と逆に質問してきたほどでした。

では、日本の男性で「むけている」という人の場合は、どうしてむけているのでしょうか。そのとき「むけている」と答えた52人の内、32人（62%）は「自然にそうなった」と回答しました。しかし—ここがおもしろいのですが—19人（37%）は、「自分でそうしようと決めて、包皮をむいて亀頭が露出したままになるように訓練した」と答えたのでした。「そうだよな。そういうことするよね、おれたち日本の男性は…」と、思わず手を取って共感したくなるころを、じっとこらえてインタビューを続けたものでした。

こういうセンシティブな問題を対面で質問してどこまで正直な回答がえられたのか…、まったくわかりません。ドイツの場合は「目視」をしているのでいいですが、日本の場合は「見栄」をはって答えた人もいるかもしれません。いつかもっと匿名性の保てる方法で、もっとたくさんの人を対象に調査してやろうと思ったのですが、なかなか機会にめぐまれずにきました。それがとうとう今年になって、ようやくネットを利用した大規模なアンケート調査を実施できることになったのでした。

日本人の「むけたまま」率は？ ——2019年のネット調査速報値

今年（2019年）8月、大阪府立大学の研究倫理審査をへたのち、「日本におけるペニスの包皮とケアに

関する調査」という Web 調査を実施しました。24 年前のインタビュー調査を参考に質問項目を作り、何回もプレ・テストを重ね修正を加えた上で、8 月 1 日から 31 日までの 1 か月間インターネット上に公開しました。アンケートへの反響は思いのほか大きく、4,849 人もの方がアクセスしてくれました。18 歳以上の男性で、ペニスのイラストが出てくるアンケート調査に参加することに同意し、最後まで質問に答えてくれた人の回答を有効としました。有効回答は 4,126 名で、そのうち 37 名は外国籍の方でした。

詳しい分析はこれからゆっくりやるとして、日本国籍をもつ 4,089 名についての速報値を伝えましょう。まず、図 1 のイラストを見てください。通常の生活時（勃起していないとき）の大人のペニスの姿を描いたものです。イラストを見ながら、読者のみなさんも自分だったらどう回答すると思うか考えてみてください。

- 一般的な大人のペニスの外見はどれに最も近いと思いますか？
- あなたが理想だと思うペニスの外見はどれに最も近いですか？
- 普段のあなたのペニスの外見はどれに最も近いですか？

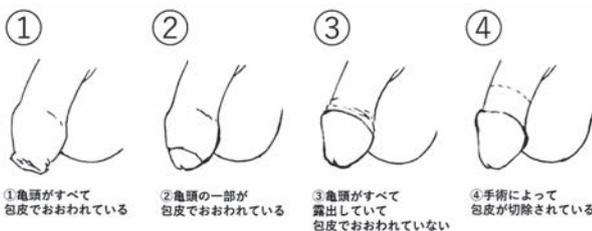


図 1 ネット調査で使用した「通常の生活時（勃起していないとき）のペニスの姿」のイラスト

一般的な大人のペニスは「むけたまま（イラスト③）」だと答えた人は、1995 年の調査では 63% もいたのですが、今回の調査ではずっと少なく 34% でした。「日本人の 7 割は仮性包茎」という言説が広まっていると冒頭で書きましたが、その結果、「大人のペニスはむけているもの」と考える人が減ったということでしょうか。興味深いのは、74% の回答者が「理想的」なペニスは「むけたまま」のペニスだと答えていたことです（1995 年の調査では「理想のペニス」については聞いていません）。

では、回答者の「自分自身のペニス」はどんな外観をしているのでしょうか。これもまた興味深い結果が出ました。イラスト③の「むけたまま」のペニスを選ん

だ人は 22% に過ぎませんでした。1995 年の調査で 54% が「むけたまま」のペニスを選んだのと比べると大きな減少です。「理想のペニスはむけたままのペニス」と考える人が 4 分の 3 もいるのに、実際にそういうペニスをしている人は 4 分の 1 もいないということです。今回の調査では、亀頭が「すべて包皮におおわれている（イラスト①）」と答えた人が 43%、「一部が包皮におおわれている（イラスト②）」と答えた人が 30% で、あわせて 73% の人が自分の亀頭は包皮におおわれていると答えていました。「日本人の 7 割は…」という言葉とよく似た結果が出たわけです。包皮切除の手術を受けている人（イラスト④）は、全体の 4% でした。

さてそれでは肝心の質問です。今回の調査で「むけている」と答えた 903 人（22%）の人たちは、いったいどうして「むけた」のでしょうか。「包皮を切除していないのに、普段から包皮がむけたままになったのはどうしてですか？」という質問への回答を見てみましょう。「とくに何もなかったが、自然にそうなった」と答えた人は 233 人（26%）だったのに対して、「意図的に（わざと）そうなるようにした」という人は 583 人（66%）もいました。なんと、高校生のときの私と同じように「意図的に手を加えた」という人が、「むけている」組の中ではむしろ多数派なんじゃないですか！

そうすると、今度は逆に「とくに何もなかったが、自然にそうなった」という答えの詳細が知りたくなってきます。残念ながら、そのように答えた人たちに今から再度確認する方法はありませんが、「その他（具体的に）」を選んだ人たちの自由記述欄から垣間見られるものがあります。マスターベーションなしセックスをたくさんしていたらむけたという記述が一番多く、お風呂で洗っていたらという人と、医者にかかったことからという人も数人ずついました。日本人の包皮は短くて、大人になると自然にむけたままになる人がいるのか、それとも日本独特の文化的プレッシャーを受けて、無意識のうちに人為的な身体改造をしているだけなのか…、この調査からだけでは、まだ今一つ結論が出ないところではあります。

日本の「むくべき・むかないべき」論争

これまで述べてきたことで、人間のペニスは、大人になってからも包皮が龟头をおおっているのが基本形

であることがわかってもらえたでしょうか。その基本形のペニスを「仮性包莖」などと呼んで、「病気の一步手前」であるかのように言うことは、百害あって一利なし。東先生と私はそう考えています。私が高校生のときに体験したような「包莖の不安」は、日本の若者たちの性の悩みごとトップ3（早漏・短小・包莖）の一つだと言われます。さらに恐ろしいことに、最初の二つ（早漏・短小）は、三つ目（包莖）の結果であるようにも言われるのです。日本家族計画協会の電話相談「思春期・FPホットライン」でも、男性からの相談内容は「包莖」(19.6%)が「自慰」(23.3%)に次いで2番目に多いそうです⁽⁴⁾。

そんな男性たちの不安が伝わるのでしょうか、小さな男の子を持つお母さんたちも「子どものペニスの包皮のケア」について不安を感じる人がたくさんいると言います。岩室紳也先生（神奈川県厚木市立病院）の推奨する「むきむき体操」がよく知られるようになってきましたが、この体操は、うまくやらないと子どもがいやがって泣いたりもするので、「本当のところ、やった方がいいんだろうか、やらなくてもいいんだろうか」と全国で話題になっているようです。先日は、とうとうNHKの「あさイチ」でも取り上げられたほどでした（2019年9月24日放映）。

同じ番組の中では、むきむき体操は「してもしなくても変わらない」という、石川英二先生（神戸・石川クリニック院長）の意見も紹介されました。石川先生は、「包莖」に関する世界中の文献をわかりやすく紹介した名著『切ってはいけません！—日本人が知らない包莖の真実』（新潮社、2005年）の著者です。石川先生によると、泌尿器科医として20年かけて集めた524例の長期観察データから、むくことを指導した場合と、しなかった場合とで、思春期が到来した後にむけるようになっている率にほとんど差がなかったそうです。どうせむけるようになるのだから、親が子どものペニスのことで悩む必要はない、という考え方です。

私は大学で「セクシュアリティとジェンダー」という科目を教えているので、しばしばこのことを学生たちと話題にします。現在20歳前後の若者たちの中には、すでに「むきむき体操」で育ってきた人たちがいます。「子どものときどう思った？」と聞くと、多くが「めっちゃいやだった」と答えます。「だって、痛いんだもん」とのことです。「で、今はどう思って

る？」と聞くと、「感謝してる。だって、むけるようになったから」と答える人がいます。「でも、何もなくてもむけるようになったと思うよ」と言うと、「うーん、そうか…」と考え込んでしまいます。

はたして、子どものペニスは親がむいてあげるべきでしょうか、放っておいたらいいのでしょうか。乳幼児期に男の子自身が答えを出すことはできません。養育者であっても、自分本人ではなく「他者」のペニスに働きかけるわけですから、後から文句が出ないようによく理解してから決めたいものです。その判断材料として、知っていなければいけないたいせつなことがあると思います。それは、「むく・むかない」の論争は、純粋に医学的なテーマというよりも、これまで見てきたような日本独特の身体観に基づいた社会・文化的なテーマなのだと思います。つまり、一見ペニスの保健衛生の方法をめぐる論争のようであるが、実は、子どもが将来「包莖の悩み」を抱かないようにするにはどうしたら一番いいのか、ということを中心とした論争なのだと思います。岩室先生自身、「むきむき体操」を説明した冊子の中で、「イマドキ男子は思春期に仲間から性の情報をもらわない時代になっています。他人に相談するのも苦手で、気が付けばとんでもない広告にだまされることも少なくありません」と述べて、「むきむき体操」による包莖の悩みの予防を訴えています⁽⁵⁾。

「むく・むかない」で悩むお母さんたちは、しばしば「夫は役に立たない」とぼやきます。夫も包皮のことをよくわかっていない、という意味だったり、夫婦の間でペニスのことを直視したことがない（ので夫がどうなっているのか知らない）という意味だったりします。親にとって性をタブーとする文化が前提では、子どものことをどうしたらいいかわからないのも当然でしょう。「大人のペニスはみんな亀頭が露出しているもの」という日本のペニス観は、歴史のどこかで生まれた誤解であることは間違いないと思います。何の説明もなく押し付けられる、たちの悪い誤解です。子どもの包皮のケアをどうするのかは、そんな誤解を前提とせずに行うことができるようになってほしいものです。

今後の研究の方向性： 海外の研究者たちとつながることの意味

東先生と私がすすめる研究は、8月末に締め切った

ばかりの Web 調査の集計をもとに、今後、日本と海外における包皮のケアの実践を比較していきたいと考えています。既に述べたように、包皮をめぐる論争は、日本では「むくか、むかないか」での議論であるのに対して、海外では「切るか、切らないか」が焦点になっています。その点、日本は「切らない」国の一つであるようであり、龟头を露出させたままにするという点では、「切る」国と共通するところも多々あります。海外で「切らない」文化の国では、包皮のケアをどうしているのでしょうか。海外で「切る」文化の国では、龟头のケアをどうしているのでしょうか。興味のあるところですよ。

世界には、信仰や部族への所属の証として包皮を切除する「割礼」の文化が多々あります。また、米国のように医療者が乳児の包皮切除を推奨する国もあります。米国全体の産科病院での新生児包皮切除実施率は、60%近く（2010年に58.3%）にのぼります。それでも近年だいぶ減った上での値だそうです⁽⁶⁾。その米国から駐留軍経由で強く影響を受ける韓国でも、兵役前（思春期前後）に包皮切除を済ませる男性が大多数です。西暦2000年前後のピーク時には、16歳～29歳の男性の84%が切除済みで、さらなる7%が「今後包皮を切除したい」と答えていました⁽⁷⁾。別のグループの研究でも、20歳の男性の78.0%が切除済み、さらなる11.5%が「今後包皮を切除したい」と答えています⁽⁸⁾。WHO（世界保健機関）は、世界の男性の30%から33%が包皮切除手術を受けていると試算しています⁽⁹⁾。陰茎がんや（パートナー女性の）子宮頸がん、HIVをはじめとする性感染症、尿路感染症や龟头包皮炎症などの予防を理由に、「すべての子どもに包皮切除を」と主張する声もあります。「包皮切除はHIVの感染リスクを低減する」という研究⁽¹⁰⁾が出て以来、WHOは、主にアフリカで大人の包皮切除を大規模に進めています。

かたや包皮を目の敵にする文化や社会があるかと思うと、包皮を守ることをライフワークとしている人たちもいます。宗教・文化・医療慣行上の包皮切除に真っ向から立ち向かう運動が盛り上がっているのです。包皮切除は、当人の体に生涯残る変更を加える行為です。一度包皮を切り取ってしまったら、龟头は常にむき出しになり、湿潤を失ってしまい角質化していきます。切り取った包皮には、実は性的な快感にとって

重要な感覚小体が豊富に配置されているという有名な研究もあります⁽¹¹⁾。医療事故でペニスを損傷させてしまうことも、珍しいとはいえ起きています⁽¹²⁾。そんなリスクを、親の判断で子どもに強要してはいけません。治療目的でもなく包皮切除をおこなうことは人権の侵害だ、と主張する人たちのことをインタクティヴィスト（Intactivist）といいます。「損なわれていない」という意味の“intact”という言葉と、アクティビスト（活動家）という言葉をかけあわせたものです。

今年の4月、イギリスでインタクティヴィストの研究集会が開かれたので、私たち二人も参加してきました。集会にはイギリスだけでなく、デンマークやフィンランド、ドイツ、米国、トルコなどから研究者やアクティビストが200名ほど参加して、各国の法律と乳幼児の（つまり、インフォームド・コンセントを伴わない）包皮切除手術の関係について熱く議論していました。自分自身が不本意に包皮を切除され、ペニスの感覚と自尊感情が著しく損なわれた、という当事者もいました。ドイツ人の青年は、ほとんど残っていない包皮を専用の器具で



図2 包皮を切除してしまった人の龟头を保護するための「人工包皮」（商品名はSenSlip）

ひっぱって、1年半かけてある程度の長さまで伸ばしてきたそうです。龟头を保護するために、コンドームにも似た帽子も使っているそうです（このような商品が市販されているということも初めて知りました）。

そんな運動が、特にヨーロッパの北側の国々では広く支持されてきています。昨年、「インタクト・デンマーク」というグループは、市民が国会審議を要求するために必要な5万人の署名を集め、医療上の理由がない包皮切除に18歳という年齢制限をかける法案を提出するにいたったそうです。女性性器切除（FGM / FGC）が非人道的行為であることには国際的なコンセンサスがあるのに、なぜ男児の性器切除は認められるのだ！ という訴えが、理を重んじる北欧圏では特に説得力があるようです。すべての形態のFGM / FGCを禁じる法律が、アフリカからの移民を受け入れる

国々で成立していますが、アイスランドでは、そういった法律から「女児」という言葉ははずして男女ともに性器切除を禁じる案が現在検討されているそうです。

そのような状況を強く警戒しているのが、ユダヤ系やイスラム系のコミュニティです。割礼禁止を阻止するためのロビー活動も盛んです。デンマークでもアイスランドでも、法案の審議を進めること自体が難しいようです。ドイツでは、2012年にケルンの地方裁判所が未成年男性への割礼を違法とする判決を出して世界を驚かせました。国内のユダヤ人コミュニティとイスラエル政府はドイツ政府に強くプレッシャーをかけ、すぐにメルケル首相は宗教上の割礼を擁護するコメントを出しました。同じ年の12月には、「医学的知識のあるもの」がおこなう限り宗教上の割礼は認められると明記した法律が速攻で成立しました。しかし、ユダヤ人の割礼文化は盤石なのかというと、改革派ユダヤ教徒の中には包皮切除に代わる宗教儀礼を提唱する動きがあるそうです。男性の体の先端をおおうこの小さな皮膚が、世界の最先端の議論を呼んでもいるのです。

「包茎の悩み」という日本独特の極めてローカルな問題を、私たちはグローバルな議論の場で紹介していきたいと考えています。視野を世界に広げることで、「アハ！」という気付きを日本に持ち帰ることができると感じるからです。その意味でも、1995年のパイロット・スタディで試みたような国際比較調査を、もっと大きな規模で、匿名性の高い形で実現したいものです。

日本のローカルな問題を議論することは、海外の関係者にとっても新たな気付きをもたらすのではないかと感じています。韓国では西暦2000年前後が包皮切除ブームのピークだったと書きましたが、2012年発表の研究では14歳～29歳の切除率は75.8%まで下がり、しかも切っている人のうち「過去10年以内に手術した」という人は4人に1人しかいなかったとのことです⁽¹³⁾。包皮切除反対の立場で啓発活動を続ける韓国のグループにその理由をたずねると、「韓国の男性たちはアメリカ以外の国々では切らないということを知らなかった。例えば日本では切らないのだ、という知識は若者たちの意識を変える上で重要だった」と話してくれました⁽¹⁴⁾。

しかしそれにしても、この小さな皮膚は、どうしてここまで人の感情を高ぶらせるのでしょうか。「むく・むかない」、「切る・切らない」は、どこの国でも純粹

に衛生や健康の問題ではなく、社会・文化と人間の性の関係性の問題であります。私たちは「身体の自律」、つまり自分の体のことは自分で決める、という考え方に関心があってこの研究をしているのですが、こと「性」がテーマとなると、文化や社会が何ともあれこれ指示を出したがり、個々の人間が何と無口で、「見ざる聞かざる言わざる」に徹することか！包皮をめぐる論争も、自分の性のことを自分で決められるためには何が必要か？ そういう目で見るとべきテーマではないでしょうか。

(注)

- (1) Pérez, G. M., Tomas Aznar, C., & Bagnol, B. (2014). Labia minora elongation and its implications on the health of women: A systematic review. *International Journal of Sexual Health*, 26(3), 155-171. ほか多数。
- (2) 下欄外アドレス参照
- (3) 福井次矢(監修)『家庭の医学』(第六版) 保健同人社、2008年
- (4) 日本家族計画協会「平成30年間の歩みと2018年度事業実績」『家族と健康』第783号2019年6月1日発行
<http://www.jfpa.or.jp/paper/KK201906.pdf>
- (5) 岩室紳也『おちんちん』日本家族計画協会、1999年/2018年。
- (6) Owings, M., Uddin, S., & Williams, S. (2013). Trends in circumcision for male newborns in US hospitals: 1979-2010. National Center for Health Statistics website. http://www.cdc.gov/nchs/data/hestat/circumcision_2013/circumcision_2013.pdf. Accessed September, 5.
- (7) Kim, D., Lee, J. Y., & Pang, M. G. (1999). Male circumcision: a South Korean perspective. *BJU international*, 83(s 1), 28-33.
- (8) Ku, J. H., Kim, M. E., Lee, N. K., & Park, Y. H. (2003). Circumcision practice patterns in South Korea: community based survey. *Sexually transmitted infections*, 79(1), 65-67.
- (9) Weiss, H., Polonsky, J., Bailey, R., Hankins, C., Halperin, D., & Schmid, G. (2007). Male circumcision: global trends and determinants of prevalence, safety and acceptability. World Health Organization and the Joint United Nations Programme on HIV/AIDS (UNAIDS).
- (10) Avert, B., Taljaard, D., Lagarde, E., Sobngwi-Tambekou, J., Sitta, R., & Puren, A. (2005). Randomized, controlled intervention trial of male circumcision for reduction of HIV infection risk: the ANRS 1265 Trial. *PLoS medicine*, 2(11), e298.
- (11) Taylor, J. R., Lockwood, A. P., & Taylor, A. J. (1996). The prepuce: specialized mucosa of the penis and its loss to circumcision. *British journal of urology*, 77(2), 291-295.
- (12) Weiss, H. A., Larke, N., Halperin, D., & Schenker, I. (2010). Complications of circumcision in male neonates, infants and children: a systematic review. *BMC urology*, 10(1), 2.
- (13) Kim, D., Koo, S. A., & Pang, M. G. (2012). Decline in male circumcision in South Korea. *BMC Public Health*, 12(1), 1067.
- (14) “Society for Circumcision Information”のメンバーに対するインフォーマル・インタビューより(2019年9月17日実施)。このグループは、注4と注8の論文を書いた研究者/教育者たちを中心とし、治療目的でない包皮切除が不要であることについての啓発活動を20年近く続けている。